

第二百二十六話 美談の実態は：ウォーナー伝説

大東亜戦争時に京都・奈良が米軍の空襲から免れ得たのは、人類の宝とも云うべき文化財を保護すべきとの米美術史家の進言を米国が受け入れたからであるとの美談が人口に膾炙している。未だにその通りであると理解している日本人が多いようだが、果たして事実はどうだったのか？

1 ウォーナー伝説 (Langdon Warner 1981~1955 米美術史家)

大東亜戦争時、京都・奈良は爆撃されなかった。この事実の理由として、ウォーナーが、空爆すべきでない地名のリスト（ウォーナーリスト）を作成して米政府に進言したから、という説がある。リストは、戦前にウォーナーが翻訳作業を手伝った日本古代美術展カタログを下敷きに作成された。ウォーナーと親交があった美術研究家の矢代幸雄が、1945年11月の朝日新聞にウォーナーリストが文化財を救ったという談話を発表したことから広まり、以来広く一般に知れ渡った。

ウォーナー賛美の事例 ・「京都国際文化観光都市建設法」の公布 ・1955年には勲二等瑞宝章の授与 ・時の高山義三京都市長によるハーバード大学への感謝状贈呈 ・法隆寺西円堂の近くに供養塔、顕彰碑ウォーナー塔 (Warner Monument) の建立 等々

2 事実はどうなのか

- (1) 米国の軍事資料をもとにした研究により、1945年7月のポツダム会談のさなかに至るまで、米国陸軍の航空部隊は京都を原爆投下の最有力都市のひとつに温存しており、原爆の物理的効果を測定するため、京都を通常爆撃の対象から外していたことが判明している。
- (2) 京都の原爆投下が避けられたのは陸軍長官ヘンリー・スティムソンによるものとされる。「京都に原爆を落とすのは対ソ戦略から政治的効果にマイナスになるから（投下しない）」と日記に記述されている由。
- (3) ウォーナーと直接交流のあった五浦研究所初代所長の稲村退三もウォーナー自身が「リストは作成したが、爆撃を中止させるほどの権限はなかった」と述べていたことを記している。
- (4) ウォーナーリストの趣旨は、戦争中の文化財保護を目的とするよりは、休戦時に、「枢軸国の博物館やその指導者の私的コレクションのなかから被侵略国に引き渡されるべき損害に対する返済用の一等価値の美術品・歴史的公文書のリスト」であることが明らかである。ウォーナーも“戦火から文化財を保護するというロバーツ委員会”のメンバーであったことは事実であり、リストはその観点で見べきだ。
- (5) ウォーナーの文化財保護の話はGHQ民間情報教育局の情報工作による宣伝で、事実と異なるとする。
- (6) リストに記載された文化財で名古屋城、岡山城など空襲によって焼失したものは多数存在する。また、実際には京都でも20回以上の空襲に遭っており、原爆の投下候補地にもなっていた。京都が結果的に大規模な空襲を免れたのは、原爆の投下目標として温存されたためである。奈良も大規模な空襲こそなかったが、小規模な空襲や機銃掃射は多々あった。ウォーナーリストに記載のある被災文化財の例（仙台城（焼失）、大垣城（焼失）、名古屋城（焼失）、熱田神宮（一部焼失）、広島城（焼失）、岡山城（焼失）等々）

3 「三つ子の魂百まで」の怖さ

小さい頃に思い込まされたことは、容易には変えられない。それが人間の性だ。